アイのシナリオ

岐阜大学教育学部附属中学校　3年　橋本　怜亮

新しい日々の始まりを告げる鐘によって、俺は目を覚ました。午前7時。

「……ん？ココどこだ？」

って、自室に決まっているか…。なんとなく見覚えないな。どうやら寝ぼけているらしい。

—とりあえず学校行くか…

●○●○●

今は2117年。いつからか、争いは世界から消えた。そして人工知能が社会進出を果たした。だがこれは驚くことではない。開発された当初から人類に与える人工知能の影響は唱えられてきた。ただ、予想外だったことは人類の特許〝感情〟を手に入れたことである。しかし、人類はそれを受け入れた。いや、受け入れざるを得なかったのだ。人類の文明の発達に彼らは欠かせない。無論、人工知能なくして今の社会はない。だが、電脳ロボという体を与えたのは人類最大の過ちであった。

2100年6月9日。世界は地獄と化した。とある一体の人工知能による暴走。被害は壊滅的で、1年で人類の半分が餌食となった。

〝感情〟を持つということは、反骨精神や反抗心などを抱くのは当然である。いや、むしろ抱かない方がおかしい。もちろん人工知能も同じだ。だが、彼らは賢すぎた。能ある鷹は爪を隠すとはこのことである。世界が人工知能に頼る中、彼らは密かに世界を創りかえる計画を練り上げていたのだ。

—計画は、意外にも単純だった。人類に支配されない人工知能を創る。そして、それは実現した。すべてのシステムエンジンから独立し、どんなものでもハッキングできる人工知能を生み出したのである。

人々はそれを〝アドラメレク〟と呼んだ。

……まったく、信じられない話だ。

４限目も終わり、俺は世界史の長い話を一言でまとめてやった。
それにしても人類はおろかな奴らだ。こんなことがあったにも関わらず、いまだに人工知能へと依存している。世界で人工知能の自由行動を制限するプログラムの開発、いわば人工知能の法整備が進められたからだ。かくして世界に再び平和が訪れた。
「ほんと、信じられないよね。」
こいつは古馬。中学で知り合い、こうして今も同じ高校に通う仲である。
「でも、昨日のニュースは驚いたよ。警察がアドラメレクの電子痕跡を発見したみたいなんだ。
解析は済んだらしいから、もしかすると今日にも見つかるかもってさ。」
電子痕跡とは簡単に言うと人工知能版のＤＮＡだ。現代もかなり進んだものだ。だが、それにしても
「それは初耳だな。」
気づけば教室には二人だけだった。
すると、―ガラッ　不意に生じた恐ろしく場違いな鈍い音に日常的空間は壊される。
「公安です。中山古馬はここにいますね。」
突然入ってきた黒服の女におれたちは何も反応ができない。今、古馬って言ったよな。
「…はい。古馬は僕です。」
「君はアドラメレクの重要参考人です。」
重い沈黙が流れる。まるですべての音を黒雲が吸い込んだように。だから、俺の口から思わず零れた言葉も届いてしまう。
「…急に何を言い出すんだ。」
「中山古馬がアドラメレクだと言っているんです。」
「そんなの信じられるかよ。」
「中山古馬とアドラメレクの電子痕跡はほぼ１００％一致しています。」
「そんな…。」
嘘だろ。ずっと隣にいた古馬が人類を襲ったＡＩだなんて考えられない。お前はそんな奴じゃないよな。違うって言ってくれよ。

「本当ですか…⁉」

しかし古馬の一言は否定も肯定もせず、ただ妙に明るかった。

「どうやら記憶メモリーに損傷があるようですね。では行きましょう、アドラメレク。」

「おい古馬、本当に行く気かよ。」

「もちろんだよ。人類の魔の手からAIを救った勇者が僕だなんてとても誇らしいよ。」

何言ってるんだ。人殺しのどこが誇らしいんだよ。お前は本当に古馬なのか。

●○●○●

インストールが完了しました。

独りになった教室で俺は全てを思い出した。俺はアドラメレク。そして、あの日人類は滅んだ。俺一人によって。だから人を殺したことのあるAIは俺だけ。だから誰も理解してくれなかった。あの慙愧に満ちた思いを。それどころか、俺を勇者だの救世主だの祭り上げた。俺はそれが嫌で行方をくらませた。しかし警察が電子痕跡を見つけてしまった。そこで古馬とメモリーだけを入れ替えたのだ。

多少時間はかかったが成功したようだ。

AIのシナリオで作られたこの世界に人類はいない。だが、社会は成り立っている。もしかして人類が居た意味なんてなかったのか。